

モンゴルノート II

2010年12月15日

長老はイエスゲイ（チンギス・ハンの父）に語った。

「そなたの妻のホルエンが一人の男の子を産んだ。顔に火あり、目に光りがある元気な男の子だ。その男の子は血の塊を握りしめて生まれてきた。

これは、この子が大きくなって戦いに強くなり、モンゴルをまとめていく人物に・・・」



西欧の歴史教育のジンギス・ハン像は、侵略者としての顔が濃厚であるという。野蛮でどう猛な未開人のように描かれることがしばしばである。

小学校の高学年だったか、鎌倉時代に蒙古は日本を侵略しようとして、二度に渡って九州に来襲したが、台風等の原因によって失敗したと歴史の教科書で教わった記憶がある。いわゆる元寇である。3年前、ゲレルマが、わたし達夫婦の部屋を訪ねてきた。

「モンゴルは、日本と仲良しをしようとしたのに、日本が断つたんだヨ」

「そんなことはない。侵略だったんじゃないの」

「ちがうヨ。モンゴルは仲良しをしようとしたの」

「へー、教育つてのは、国や立場でほんとに変わっちゃうんだなー」

歴史教育とは、そういうものかも知れない。反日、抗日といったことや、対立する国家間の自国の正当性と相手国の非のどうどう巡り。

しかしながら「侵略」と「仲良し」は違いすぎるなど思つたのを憶えている。

たまたま、NHK特集 「文明への道・モンゴル」 いう本を読んだ。

一回目の蒙古の日本遠征は、地方の軍隊が独自にやったらしい。二回目は、南宋攻略の戦後処理。

二回とも失敗に終わった。

本格的な三回目の遠征は、フビライ・ハンが行う予定であった。

しかし、韓国で起きた内乱と疫病で、その機会を失った。

フビライ・ハンの手には掛かれれば、当時の鎌倉幕府は、ひとたまりもなく敗れただろうと書かれてある。

また、元寇の間も、日本の商人達は元の国との交易を続けていたとあり、元はその商人達を拒絶したり、捕らえたりしたということもなかったらしい。交易を盛んにして、近隣諸国を連携させて、モンゴル帝国の範囲を拡大したフビライ。

元寇とは、幕末、明治の開国といった時代の帝国主義とは、侵略戦争である点はどちらも同じであ

るが、モンゴル帝国は、貿易立国であり、宗教は自由であった。

商業はイスラム人に、文化は漢民族に補佐させた交易文化であつたらしい。

そして、それはゆるやかな国家連合体であり、草原の少数民族がその帝国の範囲を拡げられたのは、武力もあるが、それ以上の国家運営理念といったものが、様々な民族を従わせた最大の理由になるのではないか。

白眉のレポートである。



その昔、フビライは、青磁を景德鎮で焼かせた。

もちろん、モンゴルの民でなく、漢民族の陶芸師に焼かせた。この青磁を「元代の青花」といい、この時代の青磁の美しさは比類がないといわれている。

その青磁は、人間がようやく抱えるほどに大きく、白地に藍の色が美しい。どうしてそのような色が表せるのだろうか。

その訳は、イスラム世界からシルクロードを伝って運ばれた高価なコバルトという顔料を使う。いわゆる「コバルト・ブルー」である。

フビライは、外交のためにこの青磁を使ったといわれ、後年、オスマン帝国のスルタンによってトルコ帝国のイスタンブールに集められた。

現在はトプカピ宮殿博物館におびただしい数の青磁が所蔵されている。

各地から税金の代わりに徴収されたというたくさんの青磁は、今も変わらず藍の色を光らせており、その青磁たちは、水をかけるとたちまちコバルト色に発色するという。

その青磁の色は、心が吸われてしまうほどの色。

宝石のような色であるといって良いと謂（い）う。

機会があればイスタンブールのコバルト・ブルーをこの目で見てみたいものである。

—— 桜の花を麻布に染める

桜の花をいくら集めても、その色は染められないしくすんだ緑しかとれない
秋の桜の幹や皮からもその色は染められないという

その桜色を現在（麻布）にあらわすにはどうするのか

桜の色は桜の咲く前の木の幹や皮に秘められている理（ことわり）

その色は、春、花の咲く前の幹や皮に蓄えられてあり

この時期の桜の木を切れば必ずやその色を得て

麻布にその淡い桜色を再現できるといふ不思議

つまり 目の前の美しい桜花は 既に過去のものであるのかと

顕（あらわ）れた事柄をどう見るかというよりも

顕れた事柄の奥にある 心を知ろうと 努めること

そんなことを思ってみたりする

余談である。

フビライの目には、モンゴル民族の範疇と国境と民族と平和は、どのような姿で画かれてあったのか。遊牧民である彼には、独特の国家と民族を越える世界観があったように僕は確信するのだ。

上都（現在の北京）に都を造ったのはフビライ・ハンである。黄河から水を引いて運河を造った。上都には、その長大な運河を使って、外国からの帆船が自由に航行したとある。

フビライは、通行税を撤廃し、税を軽くして、商人達を保護し、交易のための資金を貸し出した。交易はますます盛んになり、航行可能な範囲を商人達は活躍した。

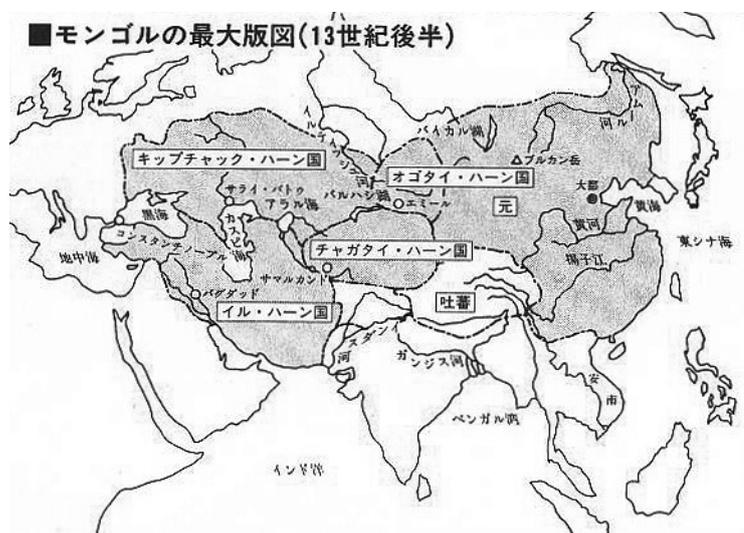
さて、フビライの胸にあった世界地図は、どんなものであったのか。

「混一疆理歴代国都の図」の地図は、モンゴル帝国を中心に据えた世界で初めての世界地図である。

地図には、モンゴル帝国の範囲。西は遠くアフリカまで、東は日本国の大まかな地図が画かれている。その航路や入り江、港の深さや砂州の詳細が画かれている。

なぜ、ここまでの地図が必要であったかの問いを、フビライの世界地図の中に求めてみる。

地図から読み取れるのは、モンゴル帝国が交易国家であり、モンゴル帝国の経営範囲に入っていな



いアフリカ大陸まで画こうとするその発想。いわゆる遊牧民というものが、どのような世界観を持ち、どのような理想を持ち、その理想をどう具現しようとしたか。

フビライの思考の系譜はどのようなものだったのかに心が動いて止まない。

マルコポーロは、「東方見聞録」の中で、「フビライ・ハンの帝国」を語っているが、当時のヨーロッパ（スペイン）の人々は、その話を信じなかった。

イスタンブールより東にそのような国家が実在するということを、にわかには信じることは出来なかったに相違ない。

フビライは、スペイン人やイスラム人、漢民族を側近に置いて、まだ見ぬ国と民族に思いを馳せ、世界戦略を練った。その開かれた思考は、歴代の中国の皇帝の器量を越える。世界史の中では第一級であり、他の支配者とはかけ離れた存在感を持つ人物のように思えてならない。



「モンゴルを変えて、そして世界を変える」

ガンゾリグやムンフーの語る「世界」という言葉の内容が、このフビライの世界と共通するものなのかを、年末に来日するガンゾリグに是非聞きたいと思っっているのだ。

そして人口270万人のモンゴル民族が、世界を変えろという観点で結束し、世界に発信できる一体社会を創り出すのかもしれないなどと思いを巡らすと、その面白さに身震いがしてくるのだ。

杉山正明氏のモンゴルに関する著書の中に、フビライが鎌倉幕府に送った親書があった。

5回に涉った親書を当時の鎌倉幕府は黙殺した。幕末の徳川幕府のアメリカに対する対応も同じ轍をを踏んでいる。

どうしたら良いのか分からないとき、「黙っている」「やり過ぎそうとする」というのも、どうやら処世としての日本人的特性なのかも知れない。

二回目の遠征軍は、軍力はそれほどでなく、遠征軍の大半は大陸での厄介者たち（平定した南宋の戦闘能力のない軍属等で戦争のあと日本に住まわせようとした）であつたという。こういう無茶もあるから、フビライのやったことすべてを評価することは出来ない。彼等は、それぞれに九州各地に漂着したり、航海中の事故や台風などでほとんど死んだとされる。最近になって、玄界灘の高島という島の近くで元寇船が海底23メートルの泥の中から発見された。全長20メートルの底板。そして船の外板以外の短い板もたくさん出てきた。ある学者によれば、多分に寝柵（ねわく）ではないかという。

船倉に柵を何段も作り、滅んだ南宋の軍属や兵士やらを寝かせた。大量に寝かされて運ばれた人々がいると思われという。亡国の民（南宋の人々）には、見知らぬ国での戦争が待っているのでは

る。

「母国の大陸に帰ることのない戦士」「死ぬまで続く戦闘の毎日」「これもフビライの世界戦略の一布石である。」

チンギス・ハンの時代、肉親と離れ戦地に赴（おもむ）く兵士が白樺の樹皮に書き残した望郷の詩の一節。

今やときぞ、我とびたたん

我は呼びかく

我が母に、何にもまましていとしい母に

山は草に満ち

愛する兄弟ら、まさに来んとす

今こそ我、故郷に帰らん

常に故郷に在らんがために

果たして、この兵士もモンゴル高原の母の元に帰ることが出来たのであろうか。

見知らぬ土地で、その城塞で、故郷の草原に思いを馳せながら、その土地の娘と婚姻し、ひよつとしたら青い目の子を持ち、栗色の髪の娘を持ったかも知れない。

その兵士の草原は、その兵士の山々は、その記憶はどのような色彩なのか。

心に映るその色彩は、曙光の中でキラキラと輝く、透明な祈りにも似たその色。

想像は果てしなく巡る。

ユーラシアのバイカル湖に近く、ブリアート族の心の色はどんな色であつたらうか

パックス・モンゴリア（モンゴルによる平和）は、強権であるにしてもユーラシアにこの時代にはありえなかつた安定した社会を150年間もたらしたともいえる。

（元朝秘史）

「天の命を受けて、この世に生まれた蒼き狼があつた。

その妻は白い牝鹿であつた。

テンギス（バイカル湖といわれる）を渡つて

オノン河の源にあるブルハン岳の牧草地に住むようになった……」

長老はイエスゲイ（チンギス・ハンの父）に語つた。

「そなたの妻のホルエンが一人の男の子を産んだ。顔に火あり、目に光りがある元気な男の子だ。

その男の子は血の塊を握りしめて生まれてきた。

これは、この子が大きくなって戦いに強くなり、モンゴルを……」

当時、大陸は部族同志の戦闘に明け暮れ、力のあるものが一時の勢力をもち、また新しい勢力に取って代わる。部族は常に力のある勢力の元に集まつた。しかし、はっきりした掟もないので、部族

間の争いは果てしなく続いた。チンギス・ハンのつくった掟は部族間の強い結束を生み、裏切りに厳罰を課すことにより、秩序ある支配と規律の厳しい軍隊が誕生した。そのチンギスの元に続々と参集する部族があり、一気にその軍団は膨張した。

話は戻る。

フビライの親書を邦訳したものを、わかりやすく書くと、

「偉大なるテングリ（モンゴルの最高の神様）（枕詞）

大蒙古国皇帝（フビライ）は書を日本国王に奉る。日本は高麗に近い。また開国以来、時に中国と通じている。フビライの時代になってから、一回も使いを持って和好をしたことがない。おそらく、日本はこのことを知っているが、あまりはつきりしていないと思うので、故に、特に使いを立てて書を持って行かせ、自分の心を伝える。願わくばこれ以降は手紙を通じ好（よし）みを結び、以て共に親睦しようではないか。そして、聖人（フビライ）は、四海（世界）が家であるから、お互い通好（交わりをむすぶこと）をすることは、決して日本の国の道理に外れることではないと思う。兵隊を使うにことになつては、それは誰も望むところではない。日本の国王へ、このことを考えてほしい。臣下とは見ていません。」といった内容である。

ただし、「国王というのは、皇帝より格下である」という学者もいるから、「格下であるけれども、臣下ではない独立国の王様へ」といった読み方が妥当（だとう）かも知れない。しかし、時の北条政権は、格下なれば、朝貢といった関係が生じる。万世一系の単一王朝である日本のメンツにかけて、国交はしないということにしたということらしい。

先にも書いたが、この時期、日本の商船ははるばる元の首都（上都・現在の北京）と交易をしていた。経済と国家（実際と建前）とは、別物だったのかも知れない。

日本に於けるこの文書は長く、「恫喝の書」であったと言われてきたから、いわゆる自家撞着（どうちやく）というか、事実を自分に都合良く解釈するというのを避けえないのかも知れない。そして文書の最後、「臣下とは見ていない」の部分は改竄（かいざん）されて反対の意味になって伝わっている。

歴史とは、元々、ある目的に添って、事実をつなぎ合わせるといふこと。

時代や国家によって、事柄や人の評価がガラツと変わる。当たり前といえば当たり前。

時代劇で主人公が変わると、先のドラマの極悪人が、突如、良心的な大名になったりするので驚くことがある。これも、画く立場でももの見方が変わるといふこと。実際は下克上（げこくじょう）に、人格者など稀（まれ）であるに相違ない。

モンゴル民族が、世界を支配するといっても、遊牧民族の人口は、農耕社会の人口からすると、微々たるものだ。自分たちが戦闘員として、すべての戦いに参加したら直ぐにも兵員は枯渇したに違いない。

フビライの戦略は、出来るだけ戦わないで勝つという戦法である。

攻城法だけを見れば、どこか豊臣秀吉の戦法に似ている。

そして、乱世終結の時期、各地に未だ溢れかえる熱気とたくさんの方闘集団の意識を、自国以外に向けるといった手法まで、フビライと秀吉は似ているのである。

侵略は、武装国家の宿命であるのかも知れない。そして帝国主義といったものもそういう宿命をもっているのだと理解する。

推測の域を出ないで恐縮であるが、フビライの世界戦略とその戦法を、秀吉が学んで実施したとしても不思議ではない。

堺屋太一氏は、チンギス・ハンの軍隊の強かった理由を三つ挙げている。

一つは、馬の左右の足を前後揃えて走る走法を訓練し、馬上の安定性がよく、弓の命中率が高かったこと。

二つは、一点集中主義、連絡を密にし指揮系統がしつかりしていた。都市城塞を各個撃破した。

三つは、物量作戦。大量の投石機を使い、石で城を埋めたこともあるという。軍事技術が格段に優れていた。

また、チンギス・ハンの三大発明といわれるもの

①軍事力の管理化。モンゴル軍は占領地の民を使役して大量の武器をつくらせ、土木工 事をさせ、最後には前線に立てて戦わした。モンゴル軍は後方に位置し、命令に背 くものは容赦なく射殺した。そして帰属順位制度をつくり、帰順者に対しては自治と 自由を認めた（もちろん税金は取る）。

②信仰の自由。19世紀のイギリスの植民地政策にも似た間接統治とある。

③大量報復戦略。一人のがガルガチ（知事、総督）と 60 人の兵士を征服した城市に駐在させ、ハーンの出先機関として行政と軍事と徴税を行った。もし、このガルガチと 60 人が殺害されるようなこ

とがあれば、その地域の「生きとし生けるもの」をすべてこの世から葬り去ったのである。(アフガニスタン・ゴルゴラの廃跡、ホラムズ、西夏)



モンゴル民族というが、モンゴルといわれる地域は、広大な草原のほんの一部である。そのこの首領のの傍系ともいえる「テムジン」こと「チンギス・ハン」が外モンゴルの草原を曲がりなりに統一した。しかし、どの部族が、いつ反旗を翻すかも知れないし、反乱は後を絶たないといえる。草原の歴史は、部族間の争いの繰り返しもあるともいえる。

また、ジンギス・ハンが世界で初めて世界帝国をつくったのかというところとも言い切れない。ユーラシアの大草原を支配した遊牧民の多民族国家は、紀元前のスキタイ（イスラム系）に始まり、匈奴（きょうど）、鮮卑（せんび）、柔然（じゅうぜん）、突厥（とっけつ）、ウイグル帝国、契丹（きつたん）と遊牧民の多民族国家が草原に次々に興ったのである。この内、突厥は現在のトルコ人の元になったといわれている。草原のテイリク系といわれる人々は、言わずもがなの「トルコ系」である。

しかし、規模と内容を見るとやはりモンゴル世界帝国がダントツである。

スキタイからモンゴル帝国に到る共通性は「遊牧民の多民族国家には国境がない」ということ。このような定義は簡単すぎるように思うが、モンゴル帝国の範囲の広がりには、尋常（じんじょう）でない。国境がないからどこまでも行くのかも知れない。

草の有るところへ、家畜と共に移動する。それが必然であり、自然であり、普遍なのだから、距離は関係ないともいえる。

何年かに一度、北の草原に雨の多い年がやってくる。

今年は雨が多い。

牧草がとれないぞ。

家畜に与える冬の乾草が十分ではない。

もう、すぐにも雪が降って来る。

大量の家畜が死ぬのはよく分かっている。

万里の長城を越えなければならぬ。

食料が必要なのだ。

馬は大丈夫か、矢は十分か。意気は高いか。

「遊牧民の論理」である。

北の草原は、雨が多かったと聞く。

草は確保できなかつたに違いない。

あいつらの考えることは分かっている。

雪が降ってきた。

あいつらが、馬に乗ってやってくる。

絶対、敵（かな）わない。

食料を隠せ。見つかったら最後だぞ。

早く、逃げろ。女と子供を避難させろ。

「耕作者の論理」である。

大陸を旅したひとであれば、モンゴルからモスクワまでの距離を、馬を引き連れて、戦争し、かつその地域を自国の領地にして、その国の人々を統治する、その野望がどれだけ大変なことなのかの一端を、大陸の広大さから知ることができる。

自動車で全速力で走り抜けたとしても、膨大な時間と苦痛が伴うのだ。

その馬の小ささと距離の関係。距離÷(馬×熱意)＝侵略 (ほんとかな?)

その熱意はどこからくるのか。

どうしてそうしたいのか。

何がそうさせるのか。

遊牧民族の血脈に滔々(とうとう)として流れるものが「何者」かを知りたいのだ。

このことも、現代のモンゴル国の人々に聞いてみたいのである。

彼等なら「それはこういうことじゃないの」といつてくれそうにも思うのである。

北宋が契丹との戦いに敗れ、北栄が契丹に毎年貢ぎものをする立場になったときから、中国の歴史に自国以外を野蛮人と称する負け惜しみの記述が始まったといわれている。

これが中華思想のはしりであるという。つまりはひがみ根性である。

21世紀、未だに中国は共産主義になってもこの考え方から抜け出られない。



話は戻って、このフビライの親書の文面からすればかつてゲレルマが語った。

「モンゴルは、仲良ししようと思つてたのに、日本が断つたんだヨ」といったこと。

それが、現代のモンゴルの歴史教育にあつても不思議はないのであると認識した。

「ヤツパリ、そうだったでしょ。ヤナギさん」とゲレルマの声が聞こえてきそうである。

「イヤー、日本はね、万世一系の国だから、王様じゃなくて、皇帝なの。だから駄目だったの」と、どこかで聞いた話をしそうである。ハハッ。

「言葉は柔らかくてもネ。やはり、フビライの野望を感じるよ」とお疑いの諸兄弟には一言もない。

しかし、歴史そのものは、絶対的な歴史などは在りようもなく、民族や国家によって、他の国家を「侵略者」や「支配者」に仕立て上げるのは簡単であるし、民族単位に自分達が正しいという前提の「正史」というものがあつても不思議ではないのである。

ともあれ、13世紀「世界を交易社会にする」という、フビライの構想には脱帽である。

こういった世界戦略を、人類で一番始めに発想し現実に着手して、ある段階まで仕上げた。

それを成したのが、他ならぬ遊牧民である「モンゴル民族」であることに心が動くのだ。そして、それをバックアップしたのが、ムスリムであり、漢民族であるのが面白いのである。また、資本主義の芽生えを、このモンゴルの交易経済の中にみる歴史学者もいる。

そして、調べてみると中国の過去のほとんどの王朝は遊牧民族によって建国されたという事実も浮かび上がって来た。ウーム。大陸とは、実に大陸なのだ。

国境のいらぬ社会、多民族国家、宗教の自由（無宗教を含む）、所有観念がない。

税の軽い制度など。現代の混迷を救う考え方が、その帝国の中に息づいていたのかも知れないなどと想像を膨（ふく）らましてしまうのである。しかし、その肯定的想像を打ち砕く苛烈な侵略や虐殺なども、その時代背景や様々な価値観の中で、行われていたらしいことも事実のようである。

しかし、現代社会でも、中東や北アフリカの激しい同民族間や隣国同士の激しい骨肉の争いともいえるような状況は、人類の愚かな側面として様々な論評されているが、今はその根本の人類を争いから救う「考え」と「実践」が待たれているのではないか。その見本、一目で分かるような見本が人類に必要とされていると確信するのだ。

モンゴル世界帝国とは、人類にとって何なのか。様々な角度から考えてみる必要があるのは、僕だけであろうか。

さてさて、モンゴルの地に、モンゴルの人々による新しい社会づくり、村づくり、人づくりが待たれている。モンゴルの会員諸氏はどのような社会を画こうとするのか。また用意しようとするのであろうか。

心は、天空を舞い、草原を駆（か）けているのである。



